

第一巻 資本の生産過程、 第四篇 相対的剰余価値の生産、  
第十二章 分業と工場手工業

**第3節 工場手工業の二つの基本形態——異種的手工業と有機的手工業**

◎工場手工業には二つの基本形態がある。

・この二重性は、製品そのものの性質から生ずる。

【281 頁後から 5 行目～】

① 異種的手工業

・(時計製品でみると。)時計は、一人の手工業者個人的製作物であったが、無数の部分労働者の社会的生産物に転化された。

・ばね製造工、文字盤製造工等々、数々の部分手工業があり、最後に、時計全体を組み立てる仕上げ工がいる。

・(大きないくつかの時計工場手工業所があるが、)一資本の指揮の下にける部分労働者の直接の協業が行なわれる。

【284 頁 5 行目～】

② 有機的手工業

・一連の段階的諸過程を通過する製品を生産するもの。

・例、縫針工場手工業

・72 種のまた 92 種にさえおよぶ特殊な部分労働者の手を経る。

【284 頁 8 行目～】

\*製品の製造時間が短縮され、手工業と比して、生産力が高められる。

・これは、工場手工業の協業から生ずる。

・しかし、一方で生産の段階では分立しており、一つの過程から他の過程へ、絶えず製品を運ぶことが必要であり、大工業からみると、工場手工業の原則に内在する制限として現われる。

【281 頁 5 行目～】

\*ある製品、例えば時計は、独立した部分生産物の単なる機械的な組合せによってできあがり、他の製品、例えば縫針は、その完成までに一連の諸過程ないしは、諸操作を順次に経過せねばならない。

\*作られる製品のこのような差異から、工場手工業には二つの基本的な形態が現われる。

\*前者は異種的手工業とよばれ、後者は有機的手工業といわれるが、それらは、形の上の相違だけでなく、工場手工業が機械制大工業へ転化する際にも、全く異なった役割を演ずる。

\*時計についていえば、それはいまや、一手工業者の個人的製作物から、無数の部分労働者の社会的生産物に転化している。

\*しかし、最後の仕上げは、やはり、バラバラな部分品を全体としての時計に結合する仕上げ工の仕事である。

\*このばあい、部品の製造が、同じ作業場に集められた部分労働者たちの直接協業によるか、労働者の自宅労働によるかは、その時の事情による。

\*というのは、自宅で仕事をしたがる労働者がお互いに激しく競争して工賃を安くし、また、生産があまりにも多くの異種的な作業にわかれているため、労働手段の共同的使用にも難があり、さらには直接的協業のための建物も節約できるので、自宅労働の結合による工場手工業経営には、それなりの利益が伴うからである。

\*しかしながら、資本家のための労働は、それが例え自宅でなされようと、資本家の指揮の下での部分労働者のそれであることに変わりなく、したがって、その地位も独立手工業のそれと全く異なる。

\*ところで、縫針工場手工業では、製品は完成まで 72 種から 92 種におよぶ連続的な作業過程を経過する。

\*この形態の工場手工業は、多数の労働者を同じ作業場に集めることによって、一つの段階から他の段階への製品の移行に伴う時間と労働とを節約し、協業の利益を資本にもたらす。

【285 頁 5 行目～】

・原料の一定量をとってみるならば、工場手工業においては、種々の部分労働者の手を経過して、原料が製品となる。

・これに反して、作業場を一つの全体機構としてみるならば、原料は、一度に、そのあらゆる生産段階に

同時に存在する。

・全体労働者は、多くの細部労働者の結合から成る。(細部労働とは、用具を用いて針金を引き伸ばす、他の道具を用いて、まっすぐにし、切ったり、とがらせたりする労働のこと。)

・「生産段階の一つの時間的階梯を通過する。」

時間の推移

原料 ○ → 半製品 □ → 製品 ☆ が、それぞれの部署を通り過ぎる。

・「一つの空間的並列に」

同時刻に、原料 ○ 半製品 □ 製品 ☆ が、現物として並べられる。(工場内に存在する。)

【285 頁 11 行目～】

・段階的過程が、時間的継起から、空間的並列に転化される。

・製品のできあがり、時間的に変化して見られることから、さらには、できあがり近づく製品の段階として、その形のまま並べられる。

【285 頁 13 行目～】

・同じ時間内に多くの完成商品が供給される。(例えば、1 時間分の部分労働で、1 時間分の完成商品ができあがる。)(半製品を 1 時間分作ると、製品が 1 時間分完成される。)

・この同時性は、(部分的労働の) 総過程の協業的なものにより生ずる。工場手工業においては、協業ではあるが、作業の分解によってつくりあげられているのである。

【285 頁後から 3 行目～】

・工場手工業は、労働者をその作業部分に固定化させることによって、「労働過程の社会的組織」を達成する。中間物を完成品とする部門をつくりあげる。

【286 頁 5 行目～】

・部分生産物は、その製品の発展段階にすぎず、次の労働者群に、その原料を供給する。

・この労働は、次の労働のための出発点となり、次の労働者に仕事を提供する。

・工場手工業の全体では、商品ができあがる時間が経験的に確定される。商品が完成する時間が平均的に決まっているが、逆にこの時間で商品をつくるために、労働過程が間断なく、並列して進行される。商品をつくるため、お互いに必要な労働過程として、依存しあい、商品を作り上げるために、この部門の労働が強制される。

・独立した手工業(従前の一人で商品を完成させる等の)や、単純な協業(独立した手工業者の集まり)とは異なった連続性、一様性、規則性、秩序、労働の強度が産み出される。

【286 頁後から 1 行目～】

・各個の生産者は、商品とその市場価格で売らねばならないから、その商品の生産に社会的に必要な労働時間で作り上げなければならないという外圧となるのである。

・工場手工業においては、部分的な過程の生産物を、与えられた時間内で決められた労働生産物量を供給することを求められる。これは、生産過程内の技術的な法則=しぼり、である。

【287 頁 10 行目～】

・部分的な過程の作成には、それぞれの作業時間があり、不等の長さである。部分作業の部分生産物は、同一時間内で、それぞれ不等量の生産物ができる。これを等量にするには、部分労働・異なる作業に、等量とするために労働者を充てることが必要となる。

・活字製造工場手工業では、磨き工 1 人に対して、鑄工 4 人、分切工 2 人を充てることとなる。同種作業に、多数の労働者を使用する。→単純な協業の原則であるが、有機的關係を表わす。

【287 頁後から 1 行目～】

・工場手工業的分業は、労働過程を質的に区分することにより、単純化、多様化し、これらの過程に応じた労働者数、比率を作り出す。これは、社会的な、この商品生産の労働過程の質的構成、量的な関係・比重をより良いものへと発展させる。

【288 頁 5 行目～】

・部分労働者群(の労働者数)が、生産規模にたいして決まっているなら、その倍数により、生産規模を拡大できる。

・監督労働、部分生産物の運搬等は、大きな生産に有利なものとなる。これらの配置は使用労働者の増大とともに、必要となるのである。

288 頁 7 行目梯隊(ていたい=行軍に際し、部隊を、前衛・本隊・側隊・後衛に順次配列した時の各々の隊。)

【288 頁最終行】

- ・部分生産機能群は、同質の諸要素からなる全体機構の一つの特別部署である。
- ・工場手工業においては、この「群」そのものが一つの編成された労働体である。
- ・各種工場手工業は、生産上の基本である「群」の作業のくり返しや、「群」の倍数的配置により形成される。
- ・例。ガラス壘（びん）の工場手工業。三段階の部分労働生産である。①準備的段階・混合・溶解。②本来のガラス製造。ガラス塊の加工。——イギリスの例を示す。
- ・①準備、②加工・製造、③完結作業、である。

【290 頁 6 行目～】

- ・工場手工業は、種々の手工業者の結合から発生するのであるが、同様に種々の工場手工業のけつごうからも発展する。
- ・例。イギリスのガラス工場は、土製溶解坩堝（るつぼ＝熱溶融合成する際に使用する耐熱容器）をみずから製造する。生産物の工場手工業が、生産手段の工場手工業と結合。
- ・生産物そのものを原料とする、あるいは生産物を自己の生産物と組み合わせるいくつかの工場手工業の結合もある。
- ・例。鉛ガラス（＝クリスタルガラス、工学ガラス、電気用ガラス）の工場手工業。ガラス研磨業や黄銅（おうどう＝銅と亜鉛の合金）鋳造業の結合。
- ・黄銅鋳造業との結合は、ガラス製品に金属を嵌め込む（はめこむ＝型などに合わせ入れる）ためのものである。
- ・結合された種々の工場手工業は、『全体工場手工業【ゲザムマヌ・ファクトゥル】』内の分離された部分をなし、それぞれ特有の分業をもつ。
- ・『結合工場手工業【コンビニールテ・ファクトゥル】』は、技術的統一を獲得しており、工場手工業が機械経営に転化するとき、初めて生ずる。

【291 頁 2 行目～】

- ・工場手工業時代は、商品生産に必要な労働時間の短縮を、意識的原則として保持する。
- ・これは、機械の使用へと発展させる。
- ・大量的に、大きな力を支出する、単純、初歩的過程においてである。
- ・例。製紙工場手工業では、ぼろの粉碎のために、製紙用圧砕機を使用した。（ぼろ＝古繊維、使用済の衣類や布類。初めのころ、製紙工場は、その原料に木綿や麻のぼろを使った。）冶金業での鉍石の粉碎で粉碎機を使用した。機械装置の原動力は、水車による原初的伝達であった。
- ・手工業時代に、らしんばん、火薬、印刷術、自動時計の偉大な発明がなされた。
- ・しかし、機械装置は、経済学者アダム・スミスにとっては脇役であった。
- ・17 世紀の機械装置の応用の重要性は、近代機械学の創造へと、当時の数学者たちが、手がかりと刺激を与えたからである。

【292 頁 8 行目～】

- ・工場手工業時代の特殊な機械装置は、多数の部分労働者の結合された全体労働者自体である。
- ・労働者には、より多くの力、より多くの熟練、より多くの精神的注意力等々が求められる。
- ・各人個人は、これらの特性を同程度には持たない。
- ・労働者は、特性に応じて区分され、分類され、編成される。
  - ・接穂（つぎほ＝接木・つぎきの若芽）
- ・工場手工業は、一面的特殊機能に役立つ労働力を発展させる。
- ・全体労働者は、一般的な生産ができるような技倆（ぎりょう＝うでまえ、手腕）で労働が可能とされ、特別な労働者（群）は、特殊技能により、生産性を上げる。
- ・部分労働者の一面性が、全体労働の完全性となる。
- ・一面的労働は、確実に全体労働となること、規則性を持って作用させることを強制する。

【293 頁後から 3 行目～】

- ・全体労働者の種々の機能は、異なる価値をもっているが、その個別労働力は種々の訓練を必要とする。
- ・工場手工業は、労働力の等級制を発展させ、労働賃金の階梯（かいてい＝はしご）を対応させる。
- ・個別労働者が一面的機能に専属させられるとき、技倆の等級制に対応させられる。
- ・すべての生産過程は、単純な諸作業を必要とするが、この作業も専属的な機能に固定される。一つの作業部門として固定化される。

【294 頁後から 5 行目～】

- ・工場手工業は、手工業における不熟練労働者を、一階級として生み出す。
- ・工場手工業が、全ての労働能力を犠牲にして、専門の特技の域に発展させるが、あらゆる発展の欠如を一つの専門とさせる。
- ・熟練労働者と不熟練労働者への区別が生ずる。
- ・不熟練労働者には、修業費用は全く不要となり、熟練労働者にとっては、手工業者と比べると、修業費用は機能の低下によって低下する。
- ・いずれの場合も、労働力の価値は低下する。  
    《《《「新しい総括機能を生み出すかぎりでは」とはどういうことか？》》》  
    《《《「例外が生ずる。」の例外とは何か？》》》
- ・修業費用の欠落または減少（から生ずる労働力の相対的価値減少）は、資本の価値増殖をとまなう。
- ・労働力の再生産に必要な時間短縮することが、剰余価値の範囲を延長するからである。

#### 第 4 節 工場手工業内の分業と社会内の分業

◎「工場手工業的分業と社会的分業の関係についてふれておく。」

【295 頁後から 5 行目～】

- ・農業、工業等のような大部門への社会的生産の分業を――→一般的分業と呼ぶ。
- ・生産部門の種、亜種への分業を――→特殊的分業と呼ぶ。
- ・一作業場内の分業を――→個別的分業と呼ぶ。

【295 頁後ろから 2 行目～】の脚注

・分業には、・さまざまな職業の分業から、・(工場手工業のように)多数の労働者が同一生産物の完成を分担する分業までである。

\*ある程度の文明に達した国では、三種の分業が見られる

① 一般的分業……国民的労働の三主要部門(農業生産者、工業者および商人)に対応する。

② 特殊的分業――→各労働部門の諸種類への分業である。(？どうということ？)

③ 第三の分業は、最後に、作業分業、または、本来の意味での分業と呼ばれるもので、個々の作業および職業の内部で行なわれ、工場や作業場で行なわれる。

【296 頁 7 行目～】

・社会内の分業に対応する個人の特殊職業部面への限定は(？どうということ？)、⇒反対の出発点(？どうということ？)から発展する。

・(家族が部族に発達したのではない。部族が社会形成の発生形態だったのである。)

\*部族(結合)の解体が始まってから後に、家族形態が発展したのである。

・一家族内、一族内での性と年齢の差異から、自然発生的な分業が発生した。

(？例えば、男性の中高齢者が熟達した労働の部門の専門化・分業とか？)

・そしてそれは、共同体の拡大、人口の増大、部族間の闘争、征服によって、分業の発生の材料を拡張する。

・種々の家族・部族・共同体が接触する地点に、生産物交換が発生する。

・異なる共同体は、異なる生産手段と生活手段を見出す。――→それらの生産様式・生活様式・生産物は種々に異なる。

・共同体間の生産物の交換は、この差異があるからなされる。

・交換は、異なる諸生産を、依存(他のものにたよる)しあうものに転化させる。

・交換によって、社会的分業が成立するのである。

・他の共同体との商品交換が、分離、分解の衝動を与えるのである。

・諸器官が独立化されて、種々の異なる労働の関連が、商品としての生産物の交換によって媒介される点にまでたちいる。(？どうということ？)・前に独立していたものが非独立化され、独立していなかったものが独立化されるのである。(？どうということ？)

【297 頁後ろから 5 行目～】

・分業の基礎は、都市と農村との分離である。

【298 頁 4 行目～】

・工場手工業内の分業では、労働者の一定数が前提となる。

- ・社会内の分業では、人口の大きさと密度が前提となる。  
 ≪稠密（ちょうみつ）ぎっしりつまっているさま≫

【299 頁 1 行目～】

- ・工場手工業的分業は、社会内の分業を必要とする。
- ・工場手工業的分業は、社会的分業を発展させ、倍加させる。
- ・労働用具の分化は、この用具を生産する産業も分化する。
- ・他の産業と関連して同一の生産が行なわれていたものが、分離、独立化が生じる。
- ・一商品の特殊生産段階は、独立の産業に転化する。
- ・製品が、諸部分生産物の組合されたものであるならば、部分労働が再び独自の手工業として独立化する。
- ・工場手工業内の完全分業は、原料の相違・原料の形態に応じて、新たな工場手工業に分離する。
- ・このようにして、18 世紀前半に、フランスでは、100 種類以上の絹織物が織られたのである。
- ・アヴィニョン（フランス南東部の都市）では、「各徒弟は必ず 1 種類の製造のみに従事し、幾種類もの織物の製造に同時に修業すべからず」という法規すら存在した。
- ・——→地域の分業は、・新たな刺激を受けた。・世界市場と、資本の進出は、社会内分業の条件を供給した。
- ・経済のみならず、あらゆる部面に。・「我々の支配する者は奴隷のみであり、自由なる民はいない」と言わしめる専門・専業の形成と、人間を細分化させることを基礎としている。

【300 頁後から 7 行目～】

- ・社会内の分業と作業場内の分業は、程度、本質を異にする。
- ・社会内の分業と作業場内の分業が類似して見えるのは、種々の業種が組み合わされているばあいである。  
 ≪紐帯（ちゅうたい）ひもとおび。（二つのものをかたく結びつけるもの）≫
- ・例として。飼育業者——→皮を生産。製革（せいかわ）業者は、皮を革（なめしがわ）にする。  
 ≪「皮」（かわ）生物の表皮加工のされていないもの。「革」（かわ、なめしがわ）なめし加工されたもの。≫
- ・製靴（せいかわ）業者は、革（なめしがわ）を、深靴（ふかぐつ＝ブーツのこと）に転化する。
- ・最終の完成態容は、彼らの特殊労働の結合、生産物である。
- \* 工場手工業的分業——部分的労働。空間的には、ひとまとめに見られる。
- \* 社会的分業——広い面積の上に散在する。従業者の数の大きさがあ  
 ——→各製造業者とそれぞれの労働の関連を生ませているものは、彼らのそれぞれの生産物の商品としての存在である。

【301 頁 6 行目～】（注脚 58 a）「それらが作られたものであるといえるのは、売れるようにできあがっているばあいである。」

- ・工場手工業的分業においては、部分労働者は何らの商品をも生産しないのである。
- ・部分労働者の共同生産物が、はじめて商品に転化する。

【301 頁 8 行目～】

- \* 社会内の分業は、種々の労働部門の生産物の売買によって媒介される。≪媒介（ばいかい＝双方の関係をとりもつ）≫——→（社会内の分業は、生産物を売買によって仲立ちさせる。）
  - ・工場手工業における諸部分労働の関連は、結合労働力として使用する同一資本家に売られることによつて、媒介される。
  - \* ・社会的分業は、（多数の相互に独立した商品生産者のあいだにおける）生産手段の分散を前提する。
  - ・工場手工業は、（資本家の手中における）生産手段の集積を前提する。
  - \* ・工場手工業では、比例数、均衡の鉄則により、一定の労働者群を配置させるが、社会的労働部門においては、偶然と恣意により、商品生産者と生産手段の配分がなされる。これは、均衡を保とうとする。社会的欲望を充足するための使用価値の生産。・自然発生的体制による欲望量のしぼりつけ。
  - ・諸商品の価値法則により、社会が、生産の全労働時間の商品種類生産への支出を規定する。
  - ・均衡を保とうとするのは、均衡の不断の「崩壊」からくるのである。
  - \* 作業場内の分業では、ア・プリオリに、計画的に守られる規律【302 頁 4 行目】
  - ・社会内の分業においては、（内的な、無言の）市場価格の変動によって、（商品生産者たちの無規律な恣意を圧倒する自然必然性として）ア・ポステリオリに作用する。【302 頁 6 行目】
- ◎ア・プリオリ（ラテン語）≪より先なるものから、の意≫

中世スコラ哲学で、因果系列の「原因、原理から始める認識方法」

◎ア・ポステリオリ（ラテン語）《より後のものから、の意》

中世スコラ哲学で、因果系列の「結果、帰結から、原因・原理にさかのぼる認識方法」

【302 頁 7 行目～】

- \*工場手工業的分業は、資本家に属する単なる肢体にすぎない人間、労働者に対する資本家の無条件的な権威を前提とする。
- \*社会的分業は、利害の圧迫が加える強制以外、権威を認めない。

【302 頁後から 8 行目～】

- ・（それは、）動物界においての種の生存条件を保持することと同様である。
- ※工場手工業的分業、すなわち（細部作業への）労働者の終生的拘束と資本に対する（部分）労働者の無条件的隷属を（労働の生産力を高める労働組織として）賛美するブルジョア的意識が、社会的生産過程の（あらゆる意識的社会的）統制や規律を、（個別）資本家の（不可侵の）所有権、自由、（自律的）「獨創性」に対する侵害として非難する。

【302 頁後から 2 行目～】

- ・『工場制度の熱狂的弁護者たちが、社会的労働のあらゆる一般的組織に対して、「それは、全社会を一つの工場に転化するであろう」という非難の言葉しか知らない。』
- ・それは、特徴的なことだ。
  - ・『工場制度の熱狂的弁護者たち』とは誰のことか？資本家たちのことか？
  - ・『社会的労働のあらゆる一般的組織に対して』とは、労働組合、社会主義者の組織のことか？
  - ・『全社会を一つの工場に転化する』とは、工場すべてを一つの「社会有」とすることか？

【304 頁後から 8 行目～】

- ・社会的分業の無政府性と工場手工業的分業の専制が、互いに制約し合う。
- ・諸産業の特殊化が進展し、法律によって確立された社会形態。
  - 《矮小化（わいしょうか＝物事が小さくなること）》
  - 《権威（＝服従させる威力）》
- ・これ以前の社会形態は、一方で社会的労働の計画的・権威的な組織の姿を示し、他方で作業場内の分業も全く排除するか、または、矮小規模で、あるいは、散在的かつ偶然的に発展する。
  - 《散在（さんざい＝ちらばって存在する。点在）》

【305 頁 3 行目～】

※例。インドの（太古的な）小共同体。

- ・土地の共有。・農業と手工業との直接的結合。・（新たな共同体の設立にあたって既定の計画や設計図として役立つ）固定した分業とに基礎を置いている。
- ・自足的な生産体をなしている。・生産物の主要量は、この自治体の自己需要のために生産される。
- ・商品としての生産ではない。
- ・インド社会の全般的分業からは独立している。
- ・生産物の余剰のみが商品に転化される。（しかも、一部分は、国家の手によってはじめて転化される。）
- ・国家には、太古以来、一定量が現物地代として流入する。
  - 《現物地代とは、農民が借地で得た生産物で納める封建地代のことである。》

【305 頁後から 7 行目～】

- ・最も単純な形態の共同体では、自治体が土地を共同に耕作して、土地の生産物を成員間に分配し、各家族は、紡いだり織ったりすることなどを家族的な副業として営む。
- ・これらの大衆の他には、裁判官と警察官と収税官を一身に兼ねている「人民の長」がいる。
- ・簿記係……農耕に関する計算を行い、査定し、記録する。
- ・第三の役人……犯罪者の告発、旅人の保護、一村から他村に案内をする。
- ・境界見張人……自分の自治体の境界を見張る。
- ・水番……農耕用共同貯水池から、水を分配する。
- ・婆羅門……宗教的礼拝を行う。
- ・教師……共同体の児童に読み書きを教える。
- ・暦術（れきじゅつ）婆羅門……占星者として播種（はしゅ＝たねまき）、収穫、農耕労働の時を告げる。
- ・農具の製造修繕の、鍛冶工と大工。
- ・陶工……村のすべての容器をつくる。（陶磁器をつくる。）
- ・理髪師、洗濯工、銀細工師、詩人。
- ・これらの人員は、全自治体の費用でまかなわれる。

- ・人口が増加すれば、これらにならい、未耕地に、新しい自治体が設けられる。

【306 頁 6 行目～】

- ・自治体機構は、計画的な分業を示しているが、しかし、工場手工業的分業は不可能である。  
———— 『すべての農具を製造し修繕する鍛冶工と大工に対する市場は、不変であり、一人の鍛冶工陶工等のかわりに、彼らの二人か三人が見られるにすぎないからだ。』（？何のことか？）

【306 頁 9 行目～】

- ・鍛冶工等の特殊手工業者は、専門的な作業を行う。たえず、同じ形態で再生産される。
- ・この共同体の不変性は、政治的嵐に影響されることなく、保たれている。

【307 頁 3 行目～】脚注

- ・村の名称、境界、利害関係は幾百年も続いた。
- ・王国の崩壊や分割について、心を労しないし、いかなる権力か、いかなる主権者か、彼らは無頓着であり、村の内部経済はもとのままである。

【307 頁後から 8 行目～】

- ・同職組合規則は、個々の親方の使用可能職人数を制限することにより、彼の資本家への転化を阻止した。
- ・同職組合は、対立する商人資本の侵害を、防禦した。
- ・商人は、あらゆる商品を買うことができたが、労働だけは商品として買えなかった。
- ・同職組合組織は、工場手工業的分業を容れることはなかった。
- ・労働者とその生産手段は、互いに結合されたままだった。工場手工業的の第一の基礎である、労働者に対する資本としての生産手段の独立化が欠けていた。

【308 頁 2 行目】蝸牛（かぎゅう……かたつむりのこと。）

※（一社会の全体における分業は、様々な経済的社会構成に存在するが、）

『工場手工業的分業は、資本主義的生産様式の全く特有なる創造物である。』